

---

# 恋愛観測

淡緑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛観測

### 【著者名】

N4136N

### 【作者名】

淡緑

### 【あらすじ】

宇宙の意志によつて観測者となる為に生み出された思念体ギイノア。

恋に恋した彼は恋の意味も知らないまま、とある世界の傲慢少女に告白の真似事をするが…

無限に連なる平行世界を内包する多次元宇宙を内包する多次元宇宙を内包する……ややこしかつたね、つまり全宇宙を内包しているのが無限宇宙、ギイノア・ヨニヴァース。

僕はこの宇宙の意志によつて観測者となる為に生み出された思念体全ての次元・時間・世界に干渉してバランスを保ち行く末を見届ける者、そして概念的存在でありながら自我を持った異形な者。名前？ そうだね…取り敢えずギイノアと名乗つておこうかな、そのまんまだけど。

さあ自己紹介はそろそろお終いにしよう、今僕は原点世界にいる。原点世界は全ての平行世界の基盤 いや初期設定とでも言つべきなのかな、この原点世界が分岐して平行世界が出来あがるんだ。もしかしたら君がいる世界がそうなのかも知れないし、そうじやないのかも知れないね。

しかも結構条件が緩くてね？ 未来に何の影響も及ぼさなくて簡単には分岐しちゃうんだから困ったもんだよ。

勿論細胞分裂みたく平行世界も分岐するから実質世界は無限にある、まあ増え過ぎると容量オーバーでパンクしちゃうから一定周期になると僕の独断と偏見で平行世界の6割を削除してるんだ。

これが基本的に観測者の僕が偶にやるお仕事で、普段は原点世界の人間として過ごしてゐる。

さて話を戻すが、今僕が原点世界にいるのは最近凄い発見をしたからなんだ。

单刀直入に言うなら恋… そう、観測者の僕が1人の人間の女の子に対して恋愛感情を抱けるという宇宙史に残るであろう大発見。

思い立つた日が吉日、早速僕は彼女に告白してみる事にした。

「 何い？ 高貴な美貌と知性を兼ね備えたこの余と付き合いたいだと？ 笑わせるなよ俗物が、貴様の様な下々の庶民では恋人所か

下僕としても余とは釣り合わんぞ。」

高圧的な口調で僕に罵声を浴びせる橙髪緑眼のこの子の名前は… そ  
ういえば未だ知らないんだっけ？

いや、よくよく考えたら喋った事も無いような気がする。

ただ僕の通う学校で一番目立つてたから無性に興味が湧いたのは覚  
えてるよ。

「あれ？ 可笑しいなあ… 仕方無い、他の女の子に告白してみようか  
？」

「… お、おい待て何処へ行く！？」

僕は諦めて近くにいる女の子に声をかけよっとしたのに、彼女が震  
えた声で僕を呼び止めて肩を掴んで来た。

この期に及んで一体何の用だらう？

もしかして罵声だけでは飽き足らずに暴力でも振るつて来るのかな。  
「何処つて… そこにいる女の子に告白しに行こうとしてるだけだよ  
？」

「つ…！ 庶民風情が何処まで余を愚弄する積もりだ？ 絶対に許さん、  
責任を取れ！」

やつぱり僕に何か酷い事をさせようとしてるし… 恋つて意外と難し  
いんだね。

無視して逃げても良いけど何か可哀想だし、仕方無いから話を聞い  
てあげよう。

「一体どんな責任取らせる気だよ…君達人間はその短い歴史の中で争いは悲劇しか生み出さないと痛感しただろ?」

僕は振り向き様にそう言った。

そしたら彼女は頬を赤く染め何か言いたそうにもじもじしている、と言うよりは確かに何かを言つてゐるんだけど声が小さ過ぎて聞き取れないって言つた方が正しいのかな?

「余の…とにかく…」

「あのさ、何て言つたか聞き取れなかつたんだけど…ごめん。」  
成るべく彼女の怒りを買わない様に僕は慎重に言葉を選んで指摘した。

でも僕の言葉で冷静になつてくれたのかな?

彼女はさつきみたいな無愛想な顔に戻つた。

「よ、余とした事が少し取り乱してしまつたな…良く聞け俗物、貴様は責任を取つて余の恋人になれ!拒否権は無いぞ?良いな…っ!？」

さつきあれだけ僕を貶しておいて何を今更言つているんだこの子は。まあ過程はどうあれ結果が一番大事、ここは反論せず従おう。

「良いよ。じゃあ早速、恋人同士性こ」

「だ、黙れ愚民!未来永劫貴様になど余の体を触れさせてやらんからな!」

僕は何も彼女の氣を悪くする言葉を使った積もりは無い、なのに思い切り蹴られた。

思念体の僕は痛みを感じられない、けれど彼女の細い足が僕の体に触れた時に彼女の記憶・感情が走馬灯の様に僕の中に流れ込んで胸が苦しくなつた。

それは多分、僕の前では傲慢な態度を取る彼女が記憶の中では独りぼっちで寂しがり屋というギャップの激しさを垣間見たからだと思

う。

この時僕は彼女を幸せにしてあげたい、そんな不思議な気持ちにさせられた。

「知らなかつたよ、君がそんなに苦しみを抱え込んでいたなんて… そう言えば僕未だ名前言つてなかつたよね？僕はギイノア、ギイノア・ニインナブル。君は？」

「お、おい貴様！名前も知らない癖に余に求愛して来るのは鳥游の沙汰にも程があるぞ！？ まあ良い、余が直々に名乗つてやるから光栄に思えよ俗物？余は高貴なる貴族ミッドハルト家の娘、ロロタル・ミッドハルト。貴様はいつか余の夫となる男、好きに呼ぶが良い。」

確かミッドハルト家と言えばこの世界を牛耳る3本柱の一柱と呼ばれるくらい有名だった筈… それなら彼女が傲慢な態度なのも受けない事も無いか。

なら呼び方は様付け？

でもそれじゃあ恋人っぽくないし… よし、ろりたんにしよう。

何か甘つたれた感じが彼女をじわじわ揶揄してゐたいで面白いし。「じゃあこれから君の事はろりたんつて呼ぶよ。あははっ！」

真面目な顔で言う積もりだつたのに堪えられずつい笑つてしまつた。当然彼女は鬼の形相をして暴力を振るつて来るんじゃないかと思つたんだけど、割と満更でも無さそうな表情を浮かべている。

「むう… 思つたより悪くないな。なら余は貴様の事をぎつたんと呼んでやるわ。」

もしかして口口タルは僕並に壊滅的なネーミングセンスを有しているのだろうか？

それに彼女の性格が性格なだけに真顔で“ぎったん”なんて言う所想像出来ない。

正直この呼び方は気に入らないけど、そんな事を言えば「貴様！余に意見する気か！？」とか言われて怒鳴られるのは間違いないしここは素直に受け取つておこう。

「はは、ありがたき幸せ…じゃあまた明日。」

僕は深々と跪いた後、足早に立ち去つとした。

「お、おい待て！貴様本当に余の恋人になる気はあるのか！？」

一体何度僕を呼び止めれば気が済むんだよこの傲慢お姫様は…大体もう恋人になつたじやないか。

「はあ…未だ何か用？」

僕は溜め息混じりに口口タルに問う。

「貴様が他の女に現を抜かさぬよう携帯電話を没収させて貰う。だが安心しろ？余が代わりに燐爛たる物を与えてやろう。」

僕が言われた通り口口タルに携帯電話を渡すと、彼女は勝ち誇った顔をしながら機能性皆無の無駄な宝石が装飾された煌びやかな携帯電話を渡して来た。

今まで僕はこんな悪趣味な携帯電話を見た事が無い、見ているだけで反吐が出そうだ。

多分口口タルは僕の個人情報を勝手に盗み見よう企んでるんだろうけど、そもそも僕の電話帳に女の子なんて一人も登録されてないしロックも掛けてあるから全く以つて無意味。

「じゃあ暇な時は連絡するよ。」

僕は心にも無い事を呟いた。

流石にこんな携帯電話では通話する気が起きないよ。

「ほ、本当か！？　ふ、ふん！微塵も期待しないで待つてやる！余はもう帰るつ！」

そう言い捨てて、ロロタルは周りの生徒達を押し退け走り去つて行つた。

それから僕も帰路に就き、町外れにある古びたアパートの2階にある一室へ入つた。

僕、ギイノア・ニインナブルは親元から離れこのおんぼろアパートで一人暮らしを満喫している。

少し話がずれるけど、観測者の僕はこの世界に紛れ込む為に人の記憶と歴史を改変して元々“僕”が存在している設定を作り上げてある。

だから僕には戸籍もあるし、血の繋がつた両親や親戚もいる事になつてゐる。

勿論僕が大富豪や実業家の息子になつて豪邸や高層マンションに住む設定にも出来た。

でも敢えてこのおんぼろアパートに居住しているのはこの管理人さんが何でも世話を焼いてくれるからだと思つ。

管理人さんは毎日ご飯を作りに来てくれるし、何より優しい。

何処かの傲慢お姫様に見習わせたいぐらいだ。

「」

突然僕のポケットに収納してある携帯電話のメロディが鳴つた。

「ん？ そう言えばさつきから携帯が鳴つて！？」め、メール60件以上來てる…！おまけに全部ロロタルからじゃないか…」  
僕がメールの内容を確認すると短い文章で…

『今何してるんだ（　）？』

『無視するとは良い度胸だな俗物（＊、＊、＊）ノ？』

『無視しないでよおおおお…（＊／＼＊）…』

「」

等、ストーカーの資質を十一分に匂わせる内容だつた。

寒気がした僕が携帯電話の電源を切り「ゴミ箱に放り投げると今度は部屋のチャイムが数回鳴った。

遂に家まで押し掛けて来たか、そう思った僕は呆れて無視し続いていると扉の向こう側から優しい声が聞こえて来る。

「ギィノア君、帰つて無いの～？ 晩ご飯作りに来たよ～」  
声の主は管理人さんだつた。

冷静に考えてみれば口口タルだつたら扉蹴破つてでも侵入して来るし少し考え過ぎだつたかな。

「すみません。ちょっと宿題やつてて…さ、どうぞ。」

僕は慌てて部屋の扉を開け、管理人さんを招き入れた。

「良いよ気にしなくて？ ギィノア君は思春期の男の子なんだから。」  
この桃髪碧眼のグラマラスな体系をした女性が管理人さんで名前はエリヴィア・レイバーンズ。

確かに19才で県内の有名な大学に通つてるらしい。

「はあ…『冗談は止めてください。管理人さんが想像してるような事一切してませんでしたから。』

僕は椅子に腰掛け、机に伏せながらそう答えた。

「あらそうなの？ あ、そういうえばさつき可愛い女の子からギィノア君宛に手紙を預かつたよ？ ギィノア君意外とモテるんだねえ～私妬いちゃうな～」

「え？」

最初は何かの冗談だと思った いやそう信じたかったけど管理人さんが本当に『ぎつたんへ』とだけ無愛想に書かれた手紙を僕に渡して來た。

恐る恐る僕は封を開けて手紙を読むと、手紙の中央に殴り書きで『明日、昼休みに学校の屋上で待つ。もし来なければ…その時は分かってるな?』と書かれていた。

「ねえなんて書かれてたの？ねえねえ～？」

何も知らない管理人さんは悪戯な笑みを浮かべながら人差し指で僕の背中をなぞる。

「ああ…えっと、あなたとは付き合えないって書かれてました。」

事情を知られたくなかった僕は書かれててもいない内容を管理人に伝え、手紙を丸めてゴミ箱に投げ入れた。

「残念だつたね、私はギイノア君の事素敵な男の子だと思うんだけど…じゃあ私が代わりにギイノア君の彼女になつてあげよっか？」

管理人さんは世の男達を悩殺するポーズで僕を「冗談混じりに誘惑する。

きつとこれが彼女なりの励まし方なんだろう。

「あはは、僕みたいな駄目男じゃ管理人さんとは釣り合いませんよ。」

僕は作り笑いを浮かべて冗談を受け流した。

「そつかそつかあ… そなんだあ… じゃあ今から晩ご飯作るから待つててね？今日はギイノア君の大好きなカレーライスだから。」

口調はいつも通りなのに、何故か管理人さんは顔が笑っていない。しかも殺氣すらひしひしと伝わつて来るし、僕は気に障る様な事でも言つてしまつたのだろうか？

「あの、管理人さん。何か怒つてますか？」

「何言つてるの？私はいつも通りよ？さ、ギイノア君はテレビでも見てて？」

管理人さんはにっこりと微笑み僕に包丁を向けながらそう言った。考えてみれば僕が管理人さんの冗談を受け流すといつも決まってこんな雰囲気になる。

僕は言われた通り大人しくリビングで夕方のニュースを見ていると台所から包丁で俎板を強く叩き付ける耳障りな音が聞こえたので、僕はリモコンでテレビの音量を上げて対処した。

すると台所から食欲をそそる香ばしい匂いが漂い始め、数十分後には管理人さんが綺麗に盛り付けられたカレーライスを持って来了。

「お待たせ~ 美味しくなかつたらごめんね?」

管理人さんは僕の前にカレーライスを置いて席に腰掛けると、頬杖を付きながら僕をじつと見つめる。いつもは晩ご飯を一緒に食べるのに今日はどうして食べずに見ているだけなんだろう。

「あの、管理人さんは食べないんですか?」

僕は思つた事を管理人に率直に質問してみた。

「気にしないで? 私今ダイエット中だから。」

「ダイエットなんかしなくても管理人さんは十分細いのに…じゃあ、頂きます。」

納得の出来ない疑念を抱きながらも空腹だった事もあり、僕はカレーライスを食べる。

相変わらず管理人さんが作つてくれたカレーライスは美味しい。

「どう? 美味しい?」

不敵な笑みを浮かべながら管理人さんは僕に問い合わせる。

「はい、とっても美味しいで あれ? 何だか急に眠くなつて…」

突然睡魔に襲われた僕は椅子から転がり落ち意識を失つた。

それから一体どれくらいの時間が経過したのか、僕は目蓋の裏に眩しい光を感じて目を覚ました。

尿意を催した僕はトイレに行く為に立ち上がろうとした時、ある異変に気付く。

見慣れない家具や何かのキャラクターのぬいぐるみ… おまけにベッドに体を縛られて動けない。

僕は自分の置かれた状況を整理して必死に昨日の出来事を思い出そうとした。

するとフライパンを持った管理人さんが扉を開けて部屋に入つて來た。

「ギィノア君おはよう。 昨夜は良く眠れた？」

そう言いながら管理人さんは乱れた僕の服装を整えてくれた。

「あの、 管理人さん。 ここは何處ですか？ それに昨日僕は…」

「覚えてないなんて酷いよ… 昨日ギィノア君にあんな恥ずかしい事されたのに…」

管理人さんは頬を赤らめながら、 上目遣いで僕を見つめる。

もしかして僕は昨日、 彼女と過ちを犯してしまったのだろうか？

いや、 そんな筈は無い。

きっと管理人さんは睡眠薬入りのカレーライスを僕に食べさせたんだ。

「僕は騙されませんよ。 どうしてカレーライスに睡眠薬を入れたんですか！？」

僕は我を忘れて管理人さんに詰め寄る。

「だつてギィノア君全然私の気持ちに気付いてくれないんだもん。だから私決めたの、 あなたを私だけの物にするつて。」

成程…つまり僕は彼女の歪んだ愛情で監禁されている、 と言つ訳か。それにして原点世界の女性は皆恐ろしい性格だ。

「あの… 好い加減漏れそうなのでこれ解いて貰えませんか？」

繩を解いて貰う口述では無く、 僕は本当に失禁しそうだった。

「ふふ、おねだりするギイノア君の可愛しさに免じて特別に解いてあげる。でも、もし逃げようとしたら殺してお人形さんにするよ?」  
思念体である観測者の僕に“死”という概念は無い。

そもそもこの肉体はこの世界に紛れ込む為の器に過ぎないし、例えこの肉体が滅びても生成すれば良い。

「はあ…心配しなくても逃げませんから安心してください。」  
一時的に自由になつた僕は軽くストレッチをしてからトイレに入つた。

勿論管理人は僕が逃亡を図らない様に扉の向こうで縄と凶器を持つて待ち構えている。

「はい、またトイレに行きたくなつたら上手におねだりしてね?」  
管理人さんはトイレから出た僕を再びベッドに縛り付け、部屋から出て行こうとする。

「あの管理人さん…そろそろ出掛けないと遅刻しちゃうんですけど…」

別に僕は学校に行きたい訳では無いけれど、昨日あれだけ鬱陶しい事をしてくれた口口タルに一言文句を言わないと気が済まない。

「ギイノア君はもう学校なんて行かなくたつて良いんだよ?トイレもご飯もそれ以外も全部私がずっとずっとお世話してあげるから。お腹空いてるよね?今朝ご飯持つて来るからお利口さんに待つててね?」

そう言い終えると、管理人は僕の頬にキスをして部屋から出て行つた。

数分後 再び部屋に訪れた管理人は両手が塞がつている僕の代わりに自分の箸でおかずを掴み僕の口元まで運ぶ。

「はい、あーん…」

まるで僕を幼児の様に扱う管理人さんに対して怒りが込み上げて来

た僕は力尽くで縄を千切り、彼女を気絶させた。

僕は宇宙の意志によつて生み出された思念体 即ち僕はその宇宙に内包されている下位の世界・次元・時空において全能に等しい力を行使出来る。

頑丈に縛られた縄が簡単に千切ない現実を捻じ曲げる事や、目の前の人間を触れずに気絶させる事なんて呼吸するのと同じくらい容易い。

「管理人さんごめんなさいっ！僕赤ちゃんプレイは好きじゃないんですね…っ！」じゃあ学校行つて来まーす！」

僕は氣絶している管理人さんに両手を合わせて謝り、家を飛び出る。その後僕は一旦自分の部屋に戻つて制服に着替えてから鞄を持って学校に向かつた。

僕が通う高校は国立ビスケンヘルム学園、国立の名を冠するだけあって学園偏差値は国内でもトップクラスらしい。

本来は成績優秀な人じゃないと入学出来ないんだけど…まあそこは察して欲しい。

因みに今は共学だけど2年前まで女子高だつたらしくから男子生徒の数が圧倒的に少なくて在籍生徒691人中男子生徒は僕を含めて13人しかいない。

「ギリギリセーフ…これなら何とか間に合うね。」

学園に着いた僕は下駄箱に行き、大慌てで靴を履き替え階段を駆け上がる。

これで無遅刻無欠席は守られる そう安心したのも束の間、僕が角を曲がろうとした時思いつ切り誰かと衝突してしまった。

「つ、きつ、貴様一体何処を見て歩いて……おい、ぎつたん！昨日余があれだけ慈愛に満ち溢れたメールを送つてやつたのに何故無視した！？答える！？返答によつては身の安全も保障し兼ねるぞ！」

僕と衝突した口口タルは地面に尻もちして苦悶の表情をしていたが、僕の姿を見るなり鬼の形相をして胸元を掴み怒号を浴びせて来た。

「何だ君か……今急いでるから後にしてくれないかな？昼休み屋上にちゃんと行くからさ。」

言いたい事は山程あるけど、今は彼女に構つてている暇は無い。

「何だとは何だ！？余はどうだけ貴様の事を……チツ、まあ良い。首を洗つて待つていろっ！」

口口タルは掴んだ僕を突き飛ばし、ゴト寧に捨て台詞まで吐いて去つて行つた。

「ろつたんは黙つてれば可愛い女の子なのになあ……つてぼーっとしてる場合じやなかつた。僕も早く教室に行かないと！」

我に帰つた僕は廊下を走り抜けて突き当たりにある『2年E組』と標識が掲げられた教室に入る。

教室内の雰囲気は静寂に包まれていて、会話をしている生徒は僅かしかいない。

さつき話した通りこの学園は国内でもトップクラスの成績を持つた生徒達が集まつて来る。

大抵そういう人達は自尊心が高くて生真面目で寡黙だし、当然慣れ合いなんて好まないから自然と休み時間は只管勉強するか小説を読んでいるかの二択になつてしまつて教室内が静かになる仕組みだ。そんな2年E組の中にも1人だけ僕の友達がいる。

「おはよーゴルケット。」

僕は机の上に堂々と足を乗せて携帯電話と睨み合う生徒に挨拶をし

て隣の席に座つた。

「なんだよギイノア、お前にしちゃ今日は随分遅いじゃねえかよ…つてかお前携帯解約したか？昨日俺が電話したら『お掛けになつた電話番号は、現在使われておりません。番号をお確かめになつてお掛け直し下さい』とか言われたぜ？」

茶髪黒眼で鋭い目付きをした彼の名前は、ヴォルケット・アークブリッジガー。

この学園で数少ない僕の友達兼希少な男子生徒だ。

ヴォルケットは3本柱の一柱アークブリングガー家の次期当主で確かに許嫁がいるとかいないとか。

「あのさ、実は昨日」

僕は昨日自分の身に降り掛かつた悲劇をありのままヴォルケットに説明した。

「へえ、あのミッドハルトのお嬢様がねえ…まあでも良かつたじゃねえか、もしかしたらミッドハルト家の当主になれんだし。」  
そう言いながらヴォルケットはさぞ他人事の様に僕の肩をポンポンと叩き頷いた。

まあ実際他人だから関係無いと言わればそれまでなんだけど…友達として何かこう、心に響くアドバイスが欲しかった。

「はあ…そくならない事を願うけど、もしそうなつたらその時はよろしく頼むよ。」

そして運命の時は訪れ、遂に昼休みになつた。

約束通り僕は最上階まで階段を上り重たい鉛色の扉を開けて屋上へ出た。

その瞬間いきなり突風が吹き荒び僕は思わず目を瞑る。

そして数秒の後に風の勢いが衰えた事を感じた僕は闇に閉ざされた視界をゆっくりと開くと、いつの間にか僕の目の前に綺麗な橙色の髪を風に靡かせながら微笑む口口タルが立っていた。

僕はその可憐な姿に見惚れて言葉も出ず、緊張して体が思う様に動かない。

「？おい、いつまでそんな間抜け面を余に晒す積もりだ？早くこっちに来い。」

「あ、うん。」

口口タルに優しく手を引かれた僕は彼女と共に青いベンチに腰掛けた。

「そ、そうだ！偶々手違いで2つ弁当を持って来てしまったから貴様に1つくれてやる…ほら食えっ！」

彼女は恥ずかしそうに俯きながら自分のベンチの上に置いてあつた弁当箱を僕の胸にぐいぐいと押し当てた。

きっとと懃々僕の為に用意してくれたんだろう、案外良い所ある。

「本当に…？僕も今日偶々弁当忘れたんだよね。じゃあ頂きます。」

僕は心置きなく立派な弁当箱の蓋を開けおかげさず箸を伸ばそうとした矢先、ある異変に気付いた。

お世辞にも美味しそうには見えない黒く焦げた卵焼き、キャラ弁を目指して途中で挫折したのか食欲を失せさせる歪んだ田口のパーツ…これは睡眠薬入りのカレーライス以上に危険な食べ物かも知れないと。

でも折角作ってくれたから食べない訳にはいかないし、取り敢えずこの卵焼き食べてみようかな。

「ど、どうだ？美味しいか？おい、黙つてないで早く答えろ！…」

余程僕の感想が聞きたいのだろうか、口口タルは僕の肩を掴み激しく揺さぶつて催促した。

これじゃあ喉が詰まつて喋りたくても喋れない。

「まあまあ落ち着いてよ。じゃあ正直に言つても良い？」

「か、構わん続ける！」

高圧的な口調とは裏腹に口口タルは緊張した面持ちで僕の言葉に耳を傾ける。

「うん、とつても不味い。まるで生ゴミを口に入れられたみたいだよ。」

口口タルの作った卵焼きは見た目以上に不味く、今にも吐きだしたいのが僕の本音。

「何だと貴様！ここは嘘でも美味しいと言つのが礼儀ではないかっ！」

そつ言いながら、いや言つた時には既に口口タルは僕の頬を力強く平手打ちしていた…正直に言つても構わないと言つた癖に。僕は彼女の言う通り嘘でも美味しいと言つべきだったのだろうか？「味はあれだつたけどさ…その、僕の為に弁当作つて来てくれて嬉しかつたよ？」

「ふん！勘違ひするなよ俗物？別に貴様の為に作つて來た訳ではない、貴様にくれてやつた方が捨てるよりはマシだと思つただけだ。」

口ではそう言いながらも口口タルは満足気な笑みを浮かべていた。

「はいはい、もうちょっと素直になりなよ？そうした方が可愛いから。」

「な…っ…この戯けがつ！」

僕が可愛いと言つた途端、頬を赤らめた口口タルは誤魔化す様に僕に罵声を浴びせて颶爽と屋上から去つて行つた。

放課後、帰り支度をしている僕にヴォルケットが近付いて来た。

「なあ、あいつ何かお前に用でもあんじゃねーの？」

そう言いながら、ヴォルケットは呆れ顔で教室の扉の方に指を差す。

「あいつ？」

半信半疑で僕がヴォルケットが指し示す方へと目をやると、ロロタルが拳動不審に扉の隙間から教室内を覗き込んでいて、僕と目が合つた途端慌てて隠れた。

そんな彼女の不審者っぷりには僕とヴォルケットは勿論ながら、他の生徒達も全員ドン引きしている。

「あはは…きっと用事があるのは僕じゃないよ？じゃ、また明日。」

悪寒がした僕は某不審者を見て見ぬ振りをしつつ足早に教室を後にした。

だけど気の所為だらうか？廊下を歩く僕の背後から気配を感じる。

「…やっぱり気の所為か。」

僕は思い切つて後ろに振り返つてみたけれど、そこにいたのは数人の女子生徒だけで懸念していたロロタルの姿は何処にも見当たらなかつた。

「管理人さん、怒つてるかなあ…許してくれると良いけど…なつ！  
い、いつからそこにいたの！？」

僕が再び廊下を歩き始めようとした矢先、気付けば目に涙を溜め顔を真つ赤にしたロロタルが小刻みに震えながら僕の前に立つていた。  
「貴様あ…何故余を無視した…つ？余は一人寂しく帰る貴様を哀れみ一緒に帰つてやろうと思つていたのだぞ…！？それなのに…それなのに貴様は…うわああああん！馬鹿！馬鹿！馬鹿！」

ロロタルは僕の前で白昼堂々と廊下中に響き渡る程の大音量で泣き叫ぶ。

当然騒ぎに気付いた生徒達の視線は自然と僕達に集まり、険悪なム

ードが漂い始めた。

僕は何もしてないのに勝手に怒るし勝手に泣くし…もう意味が分からぬよ。

何で僕はこんな子に告白してしまったんだろう。

「はあ…分かつたよ、分かつたからこんなところで泣くの止めなよ?  
僕が泣かせたみたいじゃないか。」

周囲の誤解を解く為に取り敢えずロロタルに泣き止んで欲しかったので、僕はポケットからハンカチを取り出して彼女に渡す。

「ぐずつ…次に余を無視したら我がミッドハルト家の特殊部隊を使役して貴様を社会的に抹殺してやるからな…覚悟しておけよ馬鹿者っ!」

そう言いながらロロタルは涙と鼻水で湿ったハンカチを僕の顔に押し付けた。

僕はこんな子が本当に名家のお嬢様なのか不思議で堪らない。

「はいはいお嬢様、じゃあ帰ろう?」

「つむつ…」

これで面倒事は済む…この時の僕はそう考えていたのだが、問題は後に校門を出た時起る。

実は僕とロロタルの進路は真逆にあり、そもそも一緒に帰る事自体不可能だった。

ここで素直にロロタルが諦めてくれれば良いのだけれど、彼女は無理矢理僕の服の袖を引っ張って一緒に帰らせようとする。

「いや、あの…僕あっちだから離して欲しいんですけど…っ!」  
そう言いながら僕も彼女の腕を引っ張り抵抗する。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4136z/>

---

恋愛観測

2011年12月26日23時02分発行